緑の地球　第146号　2012年7月15日発行　年6回・奇数月15日発行　発行：認定特定非営利活動法人　緑の地球ネットワーク
年間購読料2,000円（送料含む）定価300円　〒552-0012大阪市港区市岡1丁目4-24 住宅情報ビル5F　TEL. 06-6576-6181　FAX. 06-6576-6182
郵便振替　00940-2-128465　E-MAIL：gentree＠s4.dion.ne.jp　URL（ホームページ）：http://homepage3.nifty.com/gentree/

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

5月の宇久須合宿では薪割りに挑戦（本文7ページ）

Contents

●第18回会員総会の報告 …… P2
●会員総会記念講演抄録 …… P3
●宇久須合宿報告 …… P7

2012.7
146

認定特定非営利活動法人　緑の地球ネットワーク

GENに参加するには　☆会員・会報購読者になる　☆自然と親しむ会・講演会・報告会・学習会に参加する　☆ワーキングツアーに参加する
☆ビデオ『よみがえる森』を見る　☆書き損じハガキ・古切手を集めて送るetc.　★あなたのご参加を待っています！

第 18 回会員総会の報告

6月16日、大阪市立総合学習センター第1研修室にて、緑の地球ネットワーク第18回会員総会が開かれました。会員522名（団体を含む）のうち出席者数53名、委任状提出81名、書面参加211名、合計345名で総会が成立しました。

【議事】

2011年度事業報告・決算・監査報告とその承認、2012年度事業計画と予算の提案と承認、定款変更の提案と承認が行なわれました。

定款の変更については、特定非営利活動促進法の改正にともない、第4条第2項（会の活動とその種類）の表記をあらため、また、所轄庁の変更にともない、第13条3項にあった所轄庁を特定する記述を削除したもので、内容の変更はありません。

会場の一画では、仙台在住の会員が被災地支援グッズをたくさん持参して販売し、人気を集めていました。

【懇親会】

今回の会場はマルビル最上階。残念ながら雨天で見晴らしは楽しめませんでしたが、36名がにぎやかに懇親をふかめました。

苗の植え方「ビニール袋は取り除く」の確認実験（上）

前中　久行（GEN代表）

GEN代表の前中久行さんに、緑の地球環境センターでおこなった実験の報告をお寄せいただきました。2回に分けて掲載します。

大同で緑化に使う苗は、かつては裸根苗でしたが、最近では、根を傷めることが少なく移植できる時期が広がることや、ウサギが囓れない大きな苗でも植えることができるなどの利点からビニール袋苗を用いています。ただビニールは水を通さないので、植える時に取り除きます。「ビニール袋に空けた穴から根が出るので取り除かなくてもよい」という人もいますが、枯れた苗を掘ってみると袋のままということがしばしばです。苗の費用や植え穴を掘る手間に比べてビニールを取り去る手間はとるにたりないものです。わずかの手間を省いたためにそれまでの努力や投資が無に帰しては大変です。GEN単独の事業では、ビニールを取り去るのが必須の作業です。現在新しく「緑の地球環境センター」で植栽していますが、場所が変わり作業する人々も変わったために、武春珍所長らが現場でしつこく確認しています。

ところが、今年の春のツアーの村との共同植樹作業では、「ビニール袋を破ってはいけない」との説明に出くわしました。私は、聞き間違いと思い、通訳をつうじて確認すると説明者の発言はそのまま正確に伝えられていました。村住民の前で村の指導者と議論すると複雑な状況になるので、ツアーメンバーには「こっそり破って取り去ってください」と伝えました。ところがビニールを取り去ろうとすると一緒に植えている子供たちが「No！No！」と制止します。ツアーメンバーも困惑する状況で、ビニール袋が残ったものが多くなってしまいました。私は作業が終わって人気が無くなった場所から順次ビニール袋を取り除いて廻りました。

水の移動と根の伸長からは土中のビニールは邪魔になるだけです。薄くても根が突き破るのは困難です。どう考えても袋を破ってはいけないということにはならないのですが……。しかも、別の植樹地3カ所とも「破るな」だったのです。よく知っている緑化に熱心な村の指導者も「破るな」です。ビニール袋を破ることによる影響をしいてあげると、乱暴な作業で根の周りの土を落として根を傷めることぐらいでしょうか。新しくそのような通知があったのでしょうか。伝言ゲームの典型例であることを祈りますが根は深そうです。いずれにせよ事実をもとに考えることが必要ですので、急遽ビニール袋苗の植え方の実験を始めました。（続く）

袋のまま植えられたことが崖崩れで露呈したケース。根はわずかに出ているだけ。

GEN自然と親しむ会「伊吹山お花畑での薬草見学会」についてお知らせ

7月29日（日）開催のGEN自然と親しむ会「伊吹山お花畑での薬草見学会」は応募人数が定員に達したため、参加募集を停止します。ご了承ください。

助成金決定のお知らせ

国土緑化推進機構の緑の募金公募事業で「黄土高原における森林再生のための苗圃建設と運営（中国山西省大同市）」として、210万円の助成が決まりました。

GEN会員総会記念講演抄録

被災地における海岸林再生に中国での経験がいかせるか？

会員総会に先立ち、GEN顧問で白砂青松再生の会会長の小川眞さんに講演をしていただき、62名が参加しました。講演の概要をご紹介します。（文責＝編集部）

●根本から見直すとき

『地震予知と噴火予知』（井田喜明著、ちくま学芸文庫）を読むと、昨年の地震は序の口で、このあと連動地震があり、火山噴火が連続する、とあります。原発を動かすことに私が反対なのは、こんなときに動かすべきでないからです。90年代以降、大地震が続くのは、地球が活動期にあるからだと思います。

原発をやめると当面は火力発電で、温室効果ガスが増加する。それも困ります。生き残るために、方向や仕組みを根本から見直す必要があります。

今日のテーマは「被災地の海岸林再生に中国での経験が生かせるか」ですが、結論は生かせるというもの。技術も大事ですが、重要なのは20年続けてきた持続性です。

●マツの特性と役割

まず陸前高田について。4～5年前、マツが弱ったので見てほしいと依頼があり、でかけました。7万本の松林があり、外からみると緑の壁のようで、その先に砂浜があった。しかし林のなかはすけていて、これでは防潮林にならない。航空写真でみると、そこを津波が抜け、背後の高さ6mの堤防にあたって舞い上がり、滝のように落ちて堤防をえぐった。

法的規制もマツが弱った一因です。文化財指定で、一木一草取ってはいけない、間伐もするな、となった。これでは松林は守れません。江戸時代の大木が衰弱したので、昨年2月19日の朝、大掃除をし、根元に炭を埋めました。津波で家族ごとなくなった吉田会長、鈴木現会長もいっしょで、小学生も100人ほど参加した。

3週間後にあの大津波です。松林はなくなり、砂浜も消えた。3mも沈下し、町まで水が入って、復旧どころではありません。地盤をどうするか、住宅をどこに移すか、それだけで精一杯。

100年以上のマツは、途中で折れ、50年未満の木は、根こそぎ流されました。大木のマツは直根が伸び、太い根が横に腕のようにでて、手をつないで波に立ち向かったように見えます。

希望の一本松は10月に枯れました。地盤沈下で塩水に浸かったので、鉄板で囲いをして水をかいだしたが無駄でした。残った若芽を接ぎ木して、4～5本の苗を残しています。

宮城県名取市の閖上（ゆりあげ）浜は、40年前はみごとな白砂青松でした。枝もしっかり張り、波に耐えることができた。ところが砂丘が安定して災害がないと、松林の効用を忘れ、松林を伐る。太平洋側がひどく、神奈川や静岡の海岸、房総の九十九里浜などは、住宅や農耕地にしました。

閖上の30年前に植えたマツは倒れたけど、抜けなかったので、波の勢いをそぐ効果はありました。松林で津波を防ぐことはできません。勢いをそいで被害を軽減する。陸の方の江戸時代のマツは生き残り、農家などを守りました。

●マツ林を健康に維持するには

若いマツがだめなのは手入れ不足のせいです。間伐していないために枝を張らない。落ち葉がたまると、根が地表を這い、ひものようで弱い。マツは痩せ地を好む先駆植物で、荒れ地に最初に入り、それに適したキノコが菌根をつくる。土が肥えると、伸びはよくても、根の張り方が悪くなる。

間伐は地上部をすかす以上に根のため。根は地表から1m以内にあり、激しく競合します。潅木や草が入るとマツの根は成長を止め、衰弱します。根が弱ると吸水力が落ち、全体が弱ります。そこを虫や菌にやられる。

閖上浜で発見がありました。自生の若いマツが、潮をかぶり、枯れているなかで、緑鮮やかな一群のマツがあり、元気なんです。女性研究者の今野さんが、ショウロの菌をつけて植え、根元

に炭を入れました。ショウロの耐塩性は、抜群に強いよう。

閖上は平坦な土地で、田畑が水に浸かりました。マツの育苗のためには、排水して畑作りからしないといけない。陸前高田もそう。まず整地して、きれいな土を作らないといけない。肥料たっぷりの田畑では、マツは根が発達しません。

松枯れについてお聞きでしょう。マツノマダラカミキリは、てっぺんの新芽＝シュートの根元の青い皮を食べます。マツノザイセンチュウがそのときマツに移り、大増殖する。仮導管がふさがると水が上がらなくなり、マツは枯れます。その前に根が弱っているのです。吸水力が正常だとマツはヤニを出し、センチュウは繁殖できないが、根が弱るとヤニがでません。

枯れた材にカミキリの幼虫がいます。50cmの枝に5～6匹もいる。放置するといまごろの時期の夜に羽化し、キチキチと音を立てて飛び、周囲のマツを噛むので、松枯れが広がる。

1年に80～90cmも伸びるマツがあり、元気そうだけど、年輪幅が1cmもある。上に徒長、横に肥満です。軟らかいマツは、カミキリがセンチュウを移すのも容易です。土が肥え、そのうえ西からNOx、SOx、最近はアンモニアまで飛来し、亜硫酸ガスと化合して硫安になって降る。その量は膨大なものです。

私がそれに関心をもったのは、マツ

というマツに、菌根が少なくなったからです。根が黒くなって、菌根がない。吸水力が落ち、やがて根が腐る。

松林を大規模に掃除したのが、宮崎市の一ツ葉海岸です。ゴルフ場で年に2～3千本もマツが枯れたので、市に手入れを頼みました。3年間で1億5千万円かけ、落ち葉をはぎ取り、草を抜きました。ニセアカシアは根粒菌がついて窒素固定し、マツをだめにするので、徹底して退治しました。

●炭と菌根菌でマツはよみがえる

マツをよみがえらせるキーワードは炭と菌根菌です。大同での仕事もそれ。炭にはたくさんの孔があり、高温で焼くので有機物がなく、腐敗性の微生物がいません。そしてアルカリ性。菌根菌や根粒菌がこの孔に住みつきます。炭を土中に埋めると、空気と水があるので、植物の根が寄ってきて、そこで菌根菌と接触します。その仕組みは30年も前にわかっていたけど、理解されませんでした。いまではInternational Biochar Initiativesという国際組織までできて、今年9月に北京で第4回大会があるので、大同での実験結果をPRします。

弱ったマツの根元に穴を掘り、溝を切って、炭の粉を入れます。サイズが大事で1cm未満。大きくても小さすぎても根が出ません。少量のリン酸肥料を加え、ショウロにはごく少量の窒素肥料をいれます。炭のなかにたくさん根がでて、菌根を作ります。

根の表面を菌糸が包み、細胞まで入ります。それでも根を害しません。こういう関係が1億年前の白亜紀にでき、マツはキノコとともに進化した。共進化です。

マツの治療を20年前から始めました。最初は大木は避けましたが、転機は出雲大社のマツで、葉が少なく、色が悪くなっていた。表面の土を30cmはぎ取り、根の上に炭の粉を敷き、砂でおおって、キノコの胞子を撒きました。たった1年で、葉が青々とし、樹勢が回復しました。島根県三瓶山の定めの松などで実績を積みました。

海岸林の再生では、ショウロの菌をつけます。菌根ができると、大きく育ちます。植えるときは、必ず表土を取り除き、砂をむき出しにし、植え穴を掘って、炭の粉を1ℓくらい入れ、苗を植えます。根がよく繁殖し、歴然と差がつきます。

翌年にはショウロが出ます。「ショウロだ！」と声が上がると走り出し、ショウロ取りに熱中する。手回し良く鍋を準備すると、そのときに限ってショウロが出ていない。

トベラ、シャリンバイ、マサキなどを混植します。塩に強く、潮風に耐えます。大きくならないし、根の耐塩性はショウロつきのクロマツが強いので、メインはクロマツです。それが昔からのやり方なのに、昭和初めからニセアカシアを混植した。マツもよく育つといって、全国一律に奨励し、それがみな枯れた。失敗がわかるのに、林業は50～60年もかかるから怖いのです。

よく茂るときれいに見えますが、間伐をしてほぼ半数に落とします。間伐したマツのシュートを捨てていたら、「これ要らないんですか？」と、トラックを乗り付け、喜んで持って帰りました。花屋さん。正月前だったので、門松用です。

京丹後市では小さな苗を密植しています。ショウロが出たら、近くの民宿のごちそうになる。育ったマツを抜いて、ショウロ付きの苗としてよそに植えます。3つ目に密植によって立ち上がったシュートを花屋に売ります。伊藤武さんの一石三鳥のアイデア。

こういう活動は市や県に補助を頼むことが多いけど、私たちはしません。自治会なんかで30～50人集まってやっていると、市会議員がすり寄ってくる。市役所や県庁がほっておかない。県会議員がでてきて、しまいに国会議員がくる。選挙の前はとくに効果的です。「どうぞ使ってください」と言われたら大成功。

●大同での活動

大同での活動を紹介します。南天門自然植物園のマツの下にチチアワタケやヌメリイグチがでます。傘の裏側の網の部分を集め、水のなかで砕いて、タオルなどでしぼります。胞子は10μほどですから、布目を抜けます。それが胞子液原液で、ペットボトルで保存します。

冷蔵庫で貯蔵するのがいいけど、難しければ地中に埋めておきます。マツの種を蒔いて、それが発芽し、本葉が開くタイミングで、水で薄めた胞子液を撒きます。菌根のできた苗はよく成長し、根の量も多くなります。現場の山に植えると、年に40～50cmも伸びて、伸び過ぎの感がなくもない。大同は寒いので虫の心配はないかもしれないけど、わかりません。

20年以上たつと若い森林になり、広葉樹も混じって、混交林になります。一番怖いのは火事です。火が入ると、マツはものすごい勢いで燃えます。

新しい実験をしました。土を詰めたポリ袋で苗を育てますが、トウモロコシの芯を焼いた炭を少し加え、胞子液を撒きました。秋に効果を確認できれば、これからは炭を加えます。

炭と堆肥とを混ぜた炭肥で、作物の栽培実験をします。アンズでもやっています。根元に深さ30cmの穴を掘り、炭肥を埋めます。するとアーバスキュラー菌根＝A菌根というカビがアンズと共生するのを確認しました。水や養分の吸収を助けるので、かなり効果的です。

その関係は、ダイズ、トウモロコシ、ウリ、トマト、ナスなど、広範囲の作物に共通します。ところが化学肥料の普及とともに、畑から菌が消えた。日本の普通の畑にはいませんが、有機栽培の畑にはいます。土を水に溶かし、細かいフルイでゴミを除き、粘土を捨て、実体顕微鏡で観察すると、ビーズ玉のようなものが見えます。20～200μくらいで、肉眼では見えません。

このA菌根はキノコより古く4億年前です。植物が陸上に上がってしばらく、デボン紀の植物の根の化石にカビがついています。陸上植物の発生時から、植物は共生の原理で生きてきました。

大同に深入りする気はなかったのです。半砂漠で木を植えても成功率は低い。最初は大変な苦労だったでしょう。で、私は熱帯雨林で仕事をしたので↗

ボーナスカンパのお願い

いつもGENを応援していただきありがとうございます。活動を開始して今年で20周年を迎えました。この間、多くの皆さんのご支援にささえられて継続できていることに感謝いたします。GENの活動は会費、カンパ、助成金等を主な収入源としています。ぜひ会員になってください。ご寄付もご都合に合わせて無理なく続けていただきますようよろしくお願いいたします。

なお、発送作業の都合で一律に郵便振替払込票を同封いたします。最近ご協力をいただいた方には重ねてのお願いではありませんので、ご了承ください。

【ご協力項目】

○会費：一般会員12,000円、団体会員12,000円、家族会員（同居家族の2人目から）6,000円、学生会員3,000円、ジュニア会員（中学生以下）1,000円、賛助会員100,000円（すべて年額、会報購読料含む）

○会報『緑の地球』年購読料：2,000円

○運営資金：会の運営にご協力ください。金額は自由です。

○緑化基金：中国山西省・黄土高原の緑化協力全般にあてます（協力の2割までを管理費として使用します）。

○おまかせカンパ：使途を指定しない寄付です。その時々で最も必要とされているところに使わせていただきます。

GENへの寄付は所得控除あるいは税額控除を受けられます。対象となるのは2,000円以上の寄付金で、確定申告が必要です。企業（法人）からの寄付金は、一般寄付金の損金算入限度額とは別枠の損金算入限度額が認められています。個人が相続または遺贈により取得した財産を寄付した場合、相続税の課税対象から除外されます。

寄付金となるのは、運営資金、緑化基金、おまかせカンパと会費のうち1口を超える部分、賛助会費から12,000円をひいた金額です。

参加者募集

緑の地球ネットワーク20周年記念シンポジウム

『緑をまもる、命をつむぐ』

GEN20周年を記念して今年1月に東京でシンポジウムを行ない、反響を呼びました。8月には大同で記念イベントを行ない、11月には大阪でシンポジウムを行ないます。ぜひご参加ください。

●日程：11月17日（土）13：30～16：30

●会場：エルおおさか（大阪府立労働センター）

（地下鉄・京阪「天満橋」駅下車）

●参加費：1,000円（学生500円）

●パネリスト

▼只木良也さん（自然大学学長、国民森林会議会長）

▼高田直俊さん（前大阪自然環境保全協会会長）

▼前中久行さん（元大阪府立大学教授、GEN代表）

●コーディネーター

▼福本麻衣さん（イオンリテールワーカーズユニオン）

●報告

▼高見邦雄さん（GEN事務局長）

終了後、懇親会を予定しています。詳細は次号でお知らせします。

↗す。雨がたくさん降るのでラクなはずが、ここも大変でした。キノコがほとんどいない。ラワンと呼ばれる大木になるフタバガキ、これも苗にキノコをつけないと育ちません。みんな失敗しているところで、キノコをつけたらうまくいった。乾燥地でも、多雨地帯でも、キノコの助けが必要なんです。

●被災地の海岸林再生のために

東北の被災地との関係でこんなことをやっています。陸前高田の近くの松林や閖上浜から、マツの種を集めました。開く前の青い松かさを採集します。開いたものは種が落ちてるし、青すぎると発芽しません。それを送ってもらって、京都府夜久野の緑化センターで、伊藤武さんが苗を育てています。発芽率は非常に高くて94%。場所が変わると、植物はうれしいようです。帰化植物もものすごく繁殖しますね。4月13日に種を蒔いて、真砂土で覆土しました。ベンレート散布は立ち枯れ病の防止で、やりたくないけど、やらざるをえない。藁のマルチをしました。1万5千本くらいですが、間引くので、最終的には5千本になり、それで植えられるのは0.5haほど。苗を作るために広い畑が必要です。

発芽直後は種の殻がついていますが、殻がとれて本葉が開くころが菌根をつけるタイミング。その時期の根をみると、直根から細い横根が出始めており、菌根菌はこの横根につきます。ショウロの胞子液原液を数百倍に薄めてジョウロでかけます。1㎖のなかに胞子が2～3千はあります。念のために11月にも胞子液を撒きます。2年目の春にポットに鉢あげしますが、植えやすいよう根をちょっと切る。

まる2年育てた苗を、現地に植えてもらいます。ポットごとだと、輸送がたいへんなので、土を振るって苗だけ送ります。苗畑でそこまで育てる方法もありますが、動かすときに根を切るし、菌根は細い根についていて、乾燥すると死にます。面倒でもこんな手順をとります。

この苗が育って、風を防ぎ、潮から守ってくれるまでに、最低15～20年はかかります。でも誰かが手をつけないと始まりません。そのころ私は草葉の陰でしょうから、若い方によろしくお願いします。

苗作りから、植え方、落ち葉かき、間伐など、管理の方法について、マニュアルを作っています。私くらいの歳でないと、泥臭い仕事の経験がないのです。若い人は苗を育てた経験がないし、業者の育苗は野菜作りと変わりません。値段は高いけど、植えるとすぐに枯れる。

急がないで、着実にやっていかないと、こういうことは成功しません。根気のよさがある緑の地球ネットワークのみなさんに期待します。

報告

自分の目で見て理解できた大同

大泉 圭太（東北電力労働組合）

2012年春のワーキングツアー報告は今号で終わります。23名が参加した東北電力総連（4/13～20）のツアー報告です。

米国につぐ世界第2位の経済大国、街を見渡せば高層ビルがそびえ建ち、数え切れないほどの人と車が往来し、かなり華やかだが、少し街を外れると貧富の差が露呈される。中国に対して私はそんなイメージしか持っておらず、今回もこれをそのままにして渡った。結果として首都北京などはイメージ通りで、かなり発展しているという印象を受けたが、今回植林活動のために訪問した大同市郊外などは想像とはかけ離れたものだった。

まず、北京を離れてから大同市中心部までの数時間、景色の変化がない。いわゆる禿山という景色が延々と続くことに驚いた。木々もなく、雨が降るような感じもなく、乾燥しきっている。植林場所に到着してもそれは同じであり、見渡すかぎり広がった砂漠地帯、固い土。現地の酷い状況が自分の目で見て初めて理解できた気がした。ここが昔は緑に覆われていたなんていうことはとうてい信じられるような光景ではなく、それと同時にこの光景を人間が長い年月をかけて作り上げてしまったということに対しても私たちは反省しなければならないと強く感じた。

活動はGENの方々をはじめ、現地の子どもたち、イオン・サントリー労働組合の方々とおこなった。現地の人には当然言葉が通じるわけもなく、なんとなくの中国語と英語、ジェスチャーでコミュニケーションを図った。ここでも驚かされたことがある。子どもたちの積極性である。活動は水汲みや穴掘りなど、かなりの重労働で大人でもつらく感じるものだったが、子どもたちはつらそうな顔をまったくせず全員が楽しんで活動していた。好奇心も旺盛で日本から持ってきたおもちゃやお菓子などに夢中になっていた。そんな姿を見て、私も非常に楽しく感じ、精力的に活動できた。

本活動を終えて、この緑化活動はやはり地球規模の課題であると感じた。緑の協力隊は中国での活動であるが、他労組では他国で同様の活動をおこなっていると聞いたこともある。幸いにも日本はまだ砂漠化現象に陥っている場所はないかもしれない。しかし将来日本でも同様の事象が起こらないとは言いきれない。まずは全員が現状を知ることが肝心だと考える。GENの方がおっしゃっていた「今この現状を皆さんに見ていただいて、その様子を周囲に伝えてもらえることが何よりも有難い」微力かもしれないが精一杯声を上げることを決意し、宣言する。

報告

GEN自然と親しむ会報告

10年ぶりに間伐を体験して

川崎 正人（GEN会員）

5月13日、ネイチャーおおさかの指導のもと、11人が参加して太子町山田地区で間伐体験をし、さわやかな汗を流しました。

5月13日大阪の太子町（河内長野近辺）にて、太子町葉室里山クラブ主催の太子町人工林間伐隊に参加しました。GEN会員など11名の参加でした。

実は僕自身GENの活動に賛同し入会してから10年余り経つのですが、ツアーに参加したこともなく、GENで体を動かす活動はこれが初めてでした。

まず活動前に太子町葉室里山クラブよりクラブの概要、里山の種類・管理、間伐の目的・作業・効果等の説明を受けました。本活動では、山地崩壊を起こしてしまうおそれのある放置人工林の間伐をおこない、カシ、シイなどの常緑広葉樹の生える自然林へ戻る手助けをすることを目的としていました。学生時代にも何度か間伐を経験したことがあるのですが、里山を守る会とではなく林業組合との協賛でおこなったためか、用材林の間伐であり今回とはちがう活動でした。

間伐作業自体は学生時代に経験していたので、作業要領は問題なくつかむことができました。しかし10年ぶりに入る森での作業に体がついてこず、最後は手に力が入らずフラフラでした。活動開始前はうす暗い森でしたが、実質3時間ほどの作業をおこない、終了時には光が差し込む明るい森へと変わったような気がしました。

しかしながら、今回活動した森もほんとうに点みたいなもので、日本全国の森のうち3割以上が放置され緑の砂漠と化した人工林であるという事実を知り、中国とは違う緑の危機が日本にあることに気がつきました。より若い人にそういう事実を知ってもらえるよう話をする場を作っていきたいと思います。

報告

GEN関東ブランチ宇久須合宿報告

神吉 久永（サントリー労働組合）

5月11日～13日、静岡県西伊豆町の宇久須でGEN関東ブランチ宇久須合宿がおこなわれ、15名が参加しました。

西伊豆合宿については、はじめて話を聞いた時から興味があり、いつか必ず参加したいと思っていました。「東京一極集中」≒「地方の過疎化」がすすむ日本で、「炭で山と里と海をつなぐ町おこし」という発想にひかれ、実際にどのような活動をおこなっているのか体感してみたいと思っていたからです。

以前、島根県の海士（あま）町を訪れたことがありますが、この町も町長の強烈なリーダーシップのもと、過疎化から見事に復活を遂げつつある町です。くわしくは触れませんが、この町が発信しているメッセージは「ないものはない」。ないものはなくても良い、ないものはなくても生きていける、というメッセージです。

モノや情報があふれ返るこのご時世で、「本当に必要なものは何か」ということを考えさせられましたが、今回の西伊豆合宿でも同じことを体感させていただきました。

藤原國雄さんのお話を聞くかぎりでは、炭が作物に与える効果も確認できているようですし、次のステップとして、磯焼け防止にも効果が出ればいうことなしですね。一方で、町おこしという観点からは、特産品の産出を始め町自体のPR活動に今後注力することが重要なのではないかと感じました。

宇久須は山と海にかこまれ、静かで心が落ち着くところです。食べ物も空気もとてもおいしい。また近いうちに子供を連れて訪れたいと思っています。

報告

京都大学での高見事務局長の講演を企画して

鶴田 惇（大学生・GEN会員）

6月18日、京都大学で高見事務局長の講演をおこない、20名が参加しました。GEN関西ブランチメンバーの鶴田惇さんと大原一晃さんが中心になって企画運営をおこないました。

「京大の農学部なら学生でも教室を借りられますよ」という僕の気軽な一言に、「手弁当でいつでもやるぞ」と高見さんが応えてくださり、6月18日（月）、京都大学農学部にて、高見さんによる講演会が開催されました。京大農学部で一番大きい300人教室を借り、『砂漠化防止とはどういうことか？～中国黄土高原で木を植えつづけて20年～』という題でお話ししていただきました。

京大農学部入口に置いた手作りの立て看板

「大学ですし、ちょっとアカデミックな感じで」という曖昧なリクエストを反映していただき、GENの活動から、乾燥地での人々の暮らし、植林する意味、進行してきている水不足問題、南水北調プロジェクトの進行状況など、幅広く奥行きをもった内容にしていただきました。その後の質疑応答も途絶えることなく、予定していた2時間半の時間はあっという間に過ぎ去ってしまいました。参加者は、学生10人、社会人10人の20人でした。教室がすごく広々と使えたので、ストレスを感じることなく講演を聴いていただけたかな、と思います。

参加した学生と話してみると「もっと宣伝したらよかったのに。すごく面白い話だったから、参加者が少なくてもったいない」という、至極もっともな意見もいただきました。

今回は人手不足と経験不足がありましたが、次回は宣伝をもっとしっかりと行い、300人教室が埋まるくらいの人を前に高見さんにお話していただきたいと思います。

会員からのメッセージ GREEN ECHO

会員総会に寄せられたメッセージの一部をご紹介します。

○20周年、そして高見さんの2011緑色中国年度焦点人物受賞、おめでとうございます！ 節目の年の大きなプレゼントですね。総会資料で植生回復のご報告を読むと、本当にうれしくなります。菌根菌・木炭利用のDVD/パンフレットの中国語版を中国の環境NGOに贈呈したいと思いますが、可能でしょうか。（M.N）

▲中国語版、日本語版、ご希望の方にお送りします。GEN事務所までご連絡ください。

○私が参加した1995年からでも17年、長くて短い間でしたが、一番長く支援しているNPOになりました。これからも続けますので、よろしくお願いします。（H.M）

○会費納入会員で古さだけですが、いつも応援しています。機関紙も必ず図書館に届けてファイルしてもらっています。少し前ですが高校生がそれを見て いるのを目撃して嬉しく思いました。（O.C）（次ページにつづく）

情報ひろば いろんなかたち

＊当欄掲載のイベント情報は掲載時点のもので、その後変更になる可能性があります。主催者にお確かめのうえ、ご参加ください。
＊当欄に情報をお寄せください。本紙は奇数月15日ごろの発行で、締切は前月の末です。なお、紙面の都合により掲載できない場合があります。ご了承ください。

自然環境市民大学 1日体験入学

自然市民大学の講座のうち、8月～2月の9講座で体験入学を受け付けています。

●保険料：300円
●先着若干名。1人1回のみ。
●主催・問合せ・申込み：（公益社団法人）大阪自然環境保全協会市民大学係（〒530-0041　大阪市北区天神橋1-9-13ハイム天神橋202号室 tel.06-6242-8720　fax.06-6881-8103 e-mail：office@nature.or.jp　URL http://www.nature.or.jp）
●対象講座
○8月8日（水）「ツバメの塒入り」京阪観月橋駅18時集合
○9月12日（水）「植物②」泉北・光明池
○9月19日（水）「金剛山の自然」金剛山
○9月26日（水）「昆虫②」淀川河川敷
○10月6日（土）「野鳥②」南港野鳥園
○10月27日（土）「野生動物との共存」奈良公園
○11月21日（水）「地域の保全活動」富田林奥の谷
○1月23日（水）「保全運動」槙尾川ダム元計画地
○2月20日（水）箕面鉢伏山または青貝山
※講座時間は10時～15時30分頃（8月8日をのぞく）

詳しくは主催者へお問い合わせください。

（前ページからつづく）

○この一年、GENの会員でいるより、日本再生支援の方が緊急なのではと迷っていました。しかし、今回の事業報告を拝見して、やはり会員でいることも必要と思いました。後期高齢者の私ですので、皆様のご活躍、成果をお祈りするばかりですが…。（K.K）

○20年の努力、頭が下がる思いです。遠方にいて総会に参加できないのが残念です。私の小さな庭にも、GENに参加記念の「あんず」「なつめ」が実をつけ、花をつけています。皆さんの顔を思い起こしています。（M.Y）

編集後記

GENに入って改めて植物観察の楽しさを知りました。先日GEN世話人の宮本さんに宮崎マンゴーをいただき、とてもおいしかったのでタネを植えて毎日事務所で見守っていますが、3週間を過ぎても芽が出てきません。植物も見られすぎるとプレッシャーを感じるのでしょうか。気長に観察を楽しみたいと思います。（河本）